

## アカマツの友

山の尾根筋や自然林の中にそびえるアカマツは、何だか日本の「昔懐かしい風景」というイメージがあります。

アカマツは、スギ・ヒノキなどの拡大造林や寄生虫などの影響により、減少が続くため、山の中でその美しくたかましい姿が消えつつあります。

今回は、あきる野の森に生き残るアカマツへの想いを込めて語ります。



### 茶色くなり、静かに眠る

松枯れは、マツノマダラカミキリに寄生するマツノザイセンチュウという小さな虫が原因で発生します。松の中で増殖、まんえんすることで少しずつマツを枯らせます。

あきる野の多くの登山道を歩くと、モミやアカマツがポツンとあったり、並木の形で植林地の中などに残っています。モミは主に道標(みちしるべ)又は所有林の境界線として大切にされ、かなり大きいものもありますが、アカマツの並木又は群生が残っているところは限られています。

アカマツ林を歩くと、マツらしい香りがします。母国(スペイン)には、別の種類ですが、マツ林は比較的多く、同じような香りがします。アカマツは、見た目がとてもかっこいい樹木で、香りが懐かしいからか、とにかく大好きです。

アカマツに関わる生き物は、極端に多いという訳ではありませんが、よく観察するとそれなりにいます。その中には、高い依存性を示す種類がいます。まつぼっくりの種を狙うニホンリスは代表的で、局地的に生息するイスカやマツ林にしか生息しないハルゼミも印象が強いです。他にも多くの野鳥や昆虫が季節によってアカマツを頼っています。



### 松風、夏風

アカマツなどのマツ林でしか生息しない希少なハルゼミは、他のセミ類よりも早い時季に活動します。春が深まる頃又は初夏の日差しに起こされ、ハルゼミの渋い鳴き声が響き渡ります。これぞ、夏風。



### 寒気に吹かれ

冬、風の強い日、ヤマガラなどのカラ類が種を飛散させるアカマツの種を狙って集まっています。



### 見張りのクマタカ

じっくりと自分の縄張りを見通すため、アカマツなどの高木を利用することが多いタカの仲間、昔の版画などでマツとともにイラストにされていました。現在は、タカ類も大きなアカマツも少なくなりました。

このように、マツの仲間は生物多様性を高める重要な役割を果たしながら、人間の癒しにも役立っています。独特で素晴らしい植物だと思えます。あきる野だけでなく、このようなマツ林が生き残ることを祈りながら、山を歩く度に恋しく見守る気持ちを私だけに留めるのではなく、多くの人に共感してもらえたらと思います。

子どもに「**山で出会った一番怖い生き物はなに?**」と聞かれることがしばしばあります。すると、クマやイノシシなどの大型哺乳類や日本の森ではなくジャングルにいそうなワニや怪物を想像し(笑)、私が返事をする前に声に出してしまう周りの子どもたち(たまに大人)がいます。

私は、年間200日以上山に入り、長年に渡り自然に関わっています。もちろん、クマやイノシシに出会ったことはありますが、いつも動物の方が逃げてしまい襲われたことはないのであまり怖くありません。多くの人が嫌うマムシにも噛まれたことはなく、柄がきれいで基本的におとなしい蛇として個人的には好んでいます。一方、オオスズメバチやトビズムカデ、ヤマビルなどには襲われたことがあるので、嫌な経験としてずっと記憶に残る恐ろしい場面でした(笑)。ですが、私が最も怖いと思う自然の生き物は、前述のものよりもずっと小さい「**マダニ**」です。マダニは、種類が多く、幼体の場合は1mm程度と非常に小さいので、目が良くても見慣れていないと、自分の足の上を歩いていることにも気付きません。刺されると長い間付いていることもあるため、後から見つかることも多いのです。問題なのは、マダニが多くの感染症(ライム病、日本紅斑熱、SFTSなど)を媒介する可能性があることです。そして、それらが原因で死亡する例もあります。

**近年、マダニがあきる野で増加していることに気付いたため、昨年**から個体数を記録し始めました。昨年は、恐らく一昨年の2倍程度の増加傾向と推測しましたが、比較できるようになった今年は5月までの**約半年間だけで既に昨年の5倍以上の急増化**がみられます。特に4~5月の野外活動では、ほぼ毎日マダニを確認しました。以前はあまり見かけなかった登山道や林道でさえも、今や服などに付着することが少なくありません。調べたところ、この増加は私の母国など海外でも報告されており、温暖化と大型哺乳類の増加が原因であるとみられています。

マダニは、隙間を狙って皮膚にゆっくりとたどり着くので、**自然に入る際、必ず長袖長ズボンで、できればスパッツ(ゲイター)などを着用**することをおすすめします。また、時折立ち止まり、靴やズボンなどにマダニが付着しているかどうかをチェックすることが重要です。**マダニに要注意!**



**日没**、山の上から人里を見下ろすイノシシ。ニホンジカなどの中大型哺乳類は、無数のマダニを運ぶため、まんえんの原因の一つとなっています。



捕獲したキチマダニ(左)と植物の葉っぱの裏でホストを待ち伏せするタネガタマダニ(右)と見られる2種類(寄生する前の2mm程度の個体)。あきる野の代表的なマダニの種類で、複数の感染症を媒介することがあります。